



令和3年度高等学校段階の病気療養中等の生徒に対する  
ICTを活用した遠隔教育の調査研究事業 中間成果報告

# 神奈川県の取組 中間報告

ICTを活用した遠隔教育による支援体制の拡充

神奈川県教育委員会教育局指導部  
高校教育課高校教育企画室高校教育企画グループ

# 報告内容

- 1 本事業実施前の神奈川県の状態及び課題
- 2 研究内容
  - 1対1によるオンライン授業
  - 学校との意見交換
  - (オンライン授業の実施)
  - 集合型授業への参加
  - 支援プロセス
- 3 現時点の成果
- 4 現時点の課題及び今後の方策



# 本事業実施前の状況

## 講師派遣型の学習支援

- 平成26年度から開始
- 入院期間20日以上の子が対象
- 上限の設定 「1日2時間、週6時間」
- 自宅療養期間も含むことが可能

## I C Tを活用した遠隔学習支援

- 令和元年度から研究開始
- 事例が少なく、1対1の支援が中心

# 本事業実施前の課題

- 新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、外部の者が病院を訪問することが難しい状況が2年近く続いており、講師派遣型の学習支援が実施できなかった。

## 【講師派遣型学習支援の要綱の課題】

- ・ 対面による学習支援に限っていた。
  - ・ 学習支援の条件に「20日程度の入院」とあり、入院を必要としないが治療が長引くことで長期間通学できない生徒の学習支援ができなかった。
  - ・ 学習支援を行えるのは「入院中」のみと読み取れてしまう文言があった。
  - ・ 生徒の病状が回復傾向にあっても、上限（週6時間）があり、手厚い学習支援ができていなかった。
- 学校の中で体制ができていなかったため、支援を受けている生徒が遠隔で集合型授業に参加する事例がなかった。
  - 教員への周知が十分でなかったため、支援の必要があっても、支援開始が遅れる傾向があった。



支援を必要としている生徒の状況に応じて柔軟に対応できるような支援体制が必要

- Q【過去に、入院等の事情があり 学校へ登校できないなどして、授業に長期間参加できない生徒がいたか。】  
→ 「過去にいた」 66課程
- Q【講師派遣型の入院時学習支援について把握しているか。】  
→ 「把握している」 147課程
- Q【ICTを活用した遠隔学習支援について概要を把握できているか。】  
→ 「把握している」 143課程
- Q【令和3年度在籍生徒のうち、長期入院などにより遠隔による学習支援を必要とする生徒がいるか。】  
→ 「実際に支援を受けている」 8課程  
→ 「今後、受ける予定である」 11課程
- Q【遠隔による学習支援により、どのような成果があったか。】  
→ (教員の視点) Google Classroom 及び Meet の活用により、資料の提供や質疑応答ができた。  
併せて学習の様子を見取ることができた。  
→ (生徒の視点) 教員とともに学習を進めることで基礎をしっかりと学習できたため、復学に向けて不安が減った。  
そのため、治療にもポジティブに向き合えた。
- Q【遠隔による学習支援により、どのような課題が見つかったか。】  
→ 画質、教室にいる生徒との差、生徒の理解度の把握、クラウド活用スキル、などの問題が挙がった。

# 研究内容（1）

## 1 対 1 によるオンライン授業

- 生徒と講師が密にやり取りすることができるため、生徒の理解度に沿って、授業を進めることができる。
- ただし、教員の負担の増加や、非常勤講師の配置などが生じるため、無制限に増やしていけないというわけではない。継続性について検討していく必要がある。



# 研究内容（2）

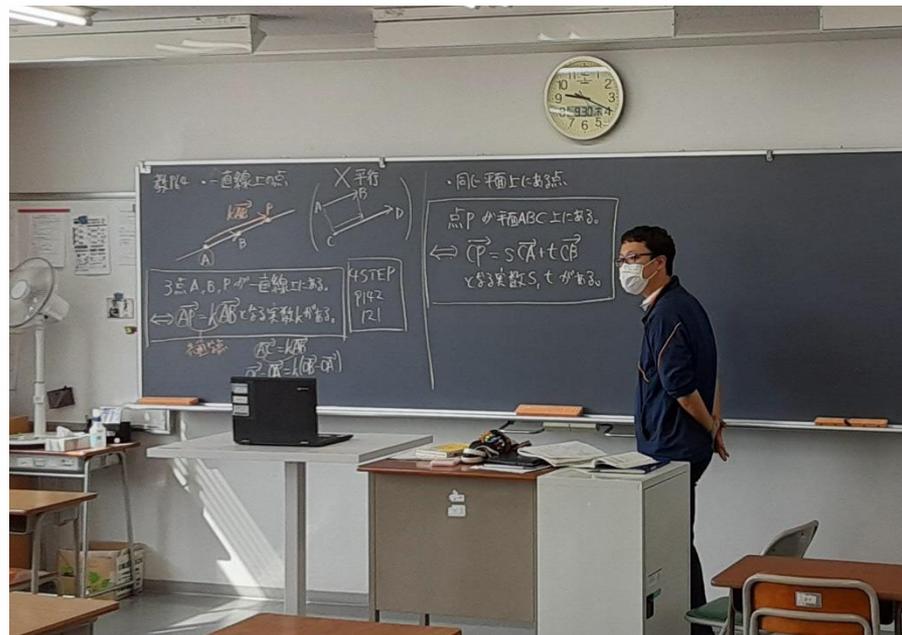
## 学校との意見交換

- 病院側が外部の者の訪問を受け入れていない。
  - 講師派遣による学習支援実施の代替方法が必要
  - 教員や講師と生徒を1対1でオンラインでつなぐ必要がある
  - 講師派遣型学習支援の要綱改正を行う
- 1対1の学習支援を受けた生徒が元気になった。
  - オンラインによる1対1の支援の機会は大切
- 入院はしていないが、症状が重い生徒がいる。
  - 支援の対象となる条件の緩和が必要
  - 講師派遣型学習支援の要綱改正を行う
- 生徒が不安を抱えている。
  - 学校との連絡機会を増やす方法の検討が必要
- 遠隔支援により集合型授業に参加した場合出席扱いにしてもらいたい。
  - 保護者・家庭の協力により実現（件数は1件のみ）
  - 出席扱いとするための条件を周知する必要がある
  - 運用の手引きを作成し、県立高校に発出する

# 研究内容（3）

## オンライン授業の実施

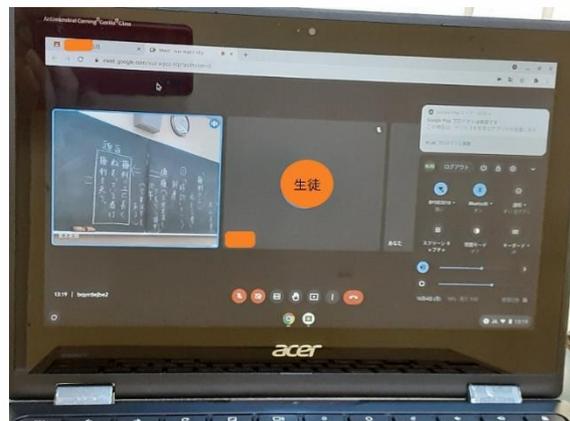
- 分散登校実施期間中に、クラウドを活用したオンライン授業実施のためのノウハウを学校側で蓄積できた。



# 研究内容（４）

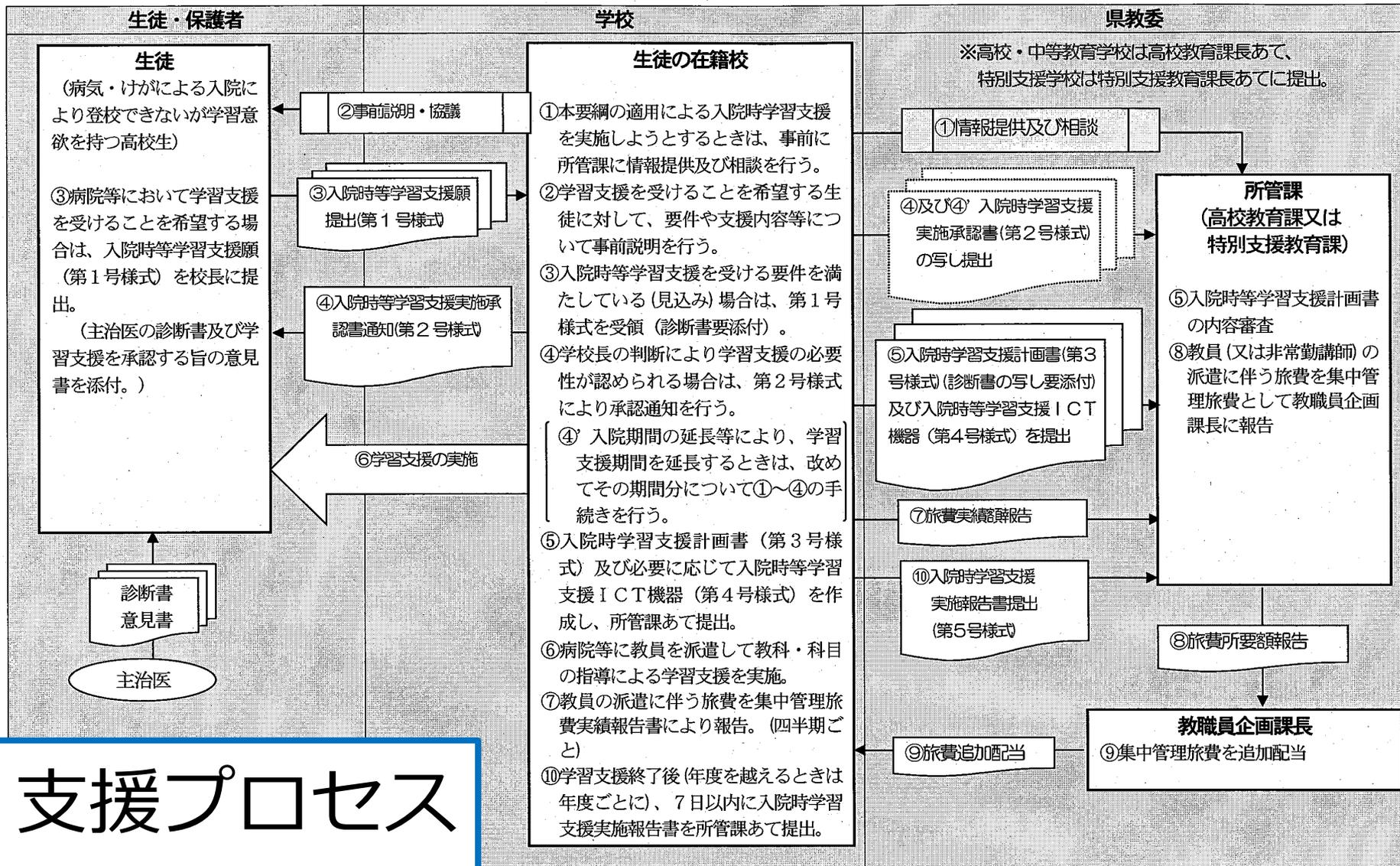
## 集合型授業への参加

- タブレット型端末を常時教室の前方に置き、黒板を部分的に写し、病院側のタブレット端末で視聴する。
- タブレット型端末のマイクで拾う音は、音割れもなく、病院側でイヤホンを使えば、教員の声を明瞭に聴くことができる。
- 教員と生徒との間で会話もできており、授業に参加できている。黒板が見えづらい時などは、生徒が先生にタブレット型端末の向きを変えるようお願いしていた。
- また、紙で配付するプリント等は、教室にいる生徒がスマホで写真を撮り、BYOD回線で画像をクラウドにアップし、入院中の生徒に見てもらするなど、教員の補佐をしていたため、授業も円滑に進んでいた。



**【課題】**  
病院側や自宅療養中、生徒の学習を常時見守る体制を取ることが難しい。  
→  
出席扱いとなったのは1例のみ。

# 研究内容 (5)



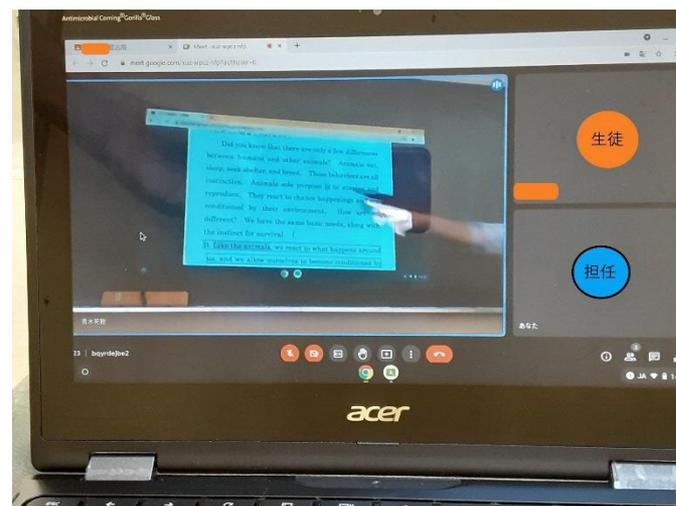
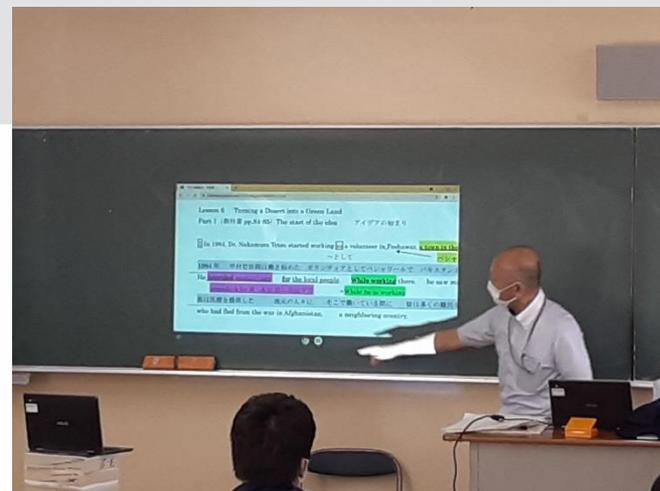
## 支援プロセス

# 現時点の成果

- 支援プロセスの確立
- クラウドの活用
- 要綱の改正（講師派遣）
- 自宅療養中の学習支援
- 支援実施の手引き（準備中）



県立高校に在籍する19名の生徒について、相談があり、県教育委員会がICTの貸与などのために関与する場合もあれば、学校単独で学習支援をすることもあった。



相談を受けてから支援を開始するまで、より円滑に手続き等を進めることができるようになり、また、講師派遣型学習支援の要綱を改正し、支援対象となる条件を緩和することで、支援を必要とする生徒へのより手厚い支援が可能となった。

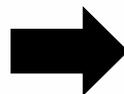
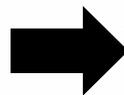
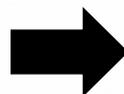
# 現時点の課題及び今後の方策

## 現時点の課題

■ 学校現場の負担  
(支援開始時の混乱)

■ 出席扱いとする条件の周知

■ 評価や単位認定の基準



## 今後の方策

■ 手引きを作成し、学校へ発出する。

■ 手引きを作成し、学校へ発出する。

■ 学校が主体となって評価、単位認定ができる仕組みを確立する。